平成２３年度組織的な大学院教育改革推進プログラム

「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」

「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

Ⅰ．自主企画の内容

（１）企画の名称

「自分を知るための「表現」－創造的自己探求のプロセスを体験する」

（２）開催日時・会場

2011 年　6 月 17 日（金）　17：30～19：30　S 棟 123、124 室

（３）講演者

石垣(岡部)　陽子（テキスタイルアーティスト、
元神戸芸術大学ファッションデザイン学科助教）

（４）企画者

青木　惠子（人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻スポーツ科学コース）

西村　美帆（人間文化研究科博士前期課程人間行動科学専攻スポーツ科学コース）

永井　夕起子（人間文化研究科博士後期課程社会生活環境学専攻人間科学講座）

（５）支援教員

成瀬　九美（文学部人間科学科教授）

（６）参加人数

１２名（内訳：［学内］教職員２名，大学院生２名，学部学生・研究生５名，［学外］３名）

（７）自主企画概要

申請代表者（青木）は小学校のダンス授業を担当する中で、作品としてのダンスが出来上がるまでに、子どもたち自身が題材・音楽・使える空間・自分の経験などからたくさんの発見をし、そこからの発想をもとに動きを作り出す姿に出会ってきた。

踊ること、音を奏でること、色や形を表すことなど、人の創造的行為はからだを全体として活動する表現行為である。個々の内面にあるイメージは、ダンス・音楽・絵画などの作品として具現化されるが、想像し、感じ、からだを動かし、創造する過程には私たちの身体的、情緒的、精神

的領域の内側を探求する道筋がある。ともすると、他者への伝達性が優先されがちな「表現」であるが、本企画では、自分を知るための「表現」、つまり自己洞察のプロセスとしての「表現」をとりあげてみた。自分の気づかなかった一面を発見し、そのことを受け入れるという過程を、「表現」を通して体験する機会になればとおもう。

踊るという表現手法は、動くことから自分の思いや感覚に気づくのだが、苦手意識を持つ人も少なくない。今回は、自分にとって全く未知の表現手法を用いた自己への気づきを体験したいという目的を、筆者自身も持って臨んだ。

テキスタイルアーティストの石垣陽子氏を講師に招いてワークショップ形式でセミナーを開いた。石垣氏は染色、刺繍等の染織技術、繊維素材を使い、思春期の自己身体への不信感など、女性たちの身に起こる変化と、そこに付随する感情の喪失や痛みを表現する作品を手がけている。石垣氏自身が、作品をスライドで紹介し解説を加えるといった形で作品を鑑賞した後に、石垣の作品シリーズである「感情を染めたシャツ」を受講者が製作してみた。

「染め」作業の手順説明を簡単に石垣氏から受けると、各自が早速作業に取り掛かった。刷毛でシャツを染めていく作業は概ね３０分ほどで終了した。作業終了後に、各々持参したシャツにまつわる思い出を話し、作品鑑賞と「染め」作業を振り返った。創造的行為に潜在する自己探求のプロセスについて、石垣氏を交えて意見を交換した。作業したこと、過去の出来事と感情を話したことで、気づいたことが参加者全員に感じられた。「楽しかった」という一致した感想も得られた。

Ⅱ．実施報告

１．石垣作品鑑賞

Ｓ１２５教室に、プロジェクターを用意し、石垣作品を鑑賞した。最初に、テキスタイルアーティストは「布」を扱った芸術であること、特に石垣氏は「ロウケツ染め」から始まり「染め」主体に、「刺繍」などの染織の技法を用いて作品を作ってこられたことを話された。その後、石垣氏がスライドでご自身の作品を紹介しながら、その作品についてのコンセプトを話された。作品一つ一つについての説明の中では、「女性」「痛み」というキーワードがでてきた。「強い女性」「年を取った女性」「女性の皮膚のあたたかみ」といったものをイメージしてこられたことを作品ごとに丁寧に解説され、なるほどと参加者が頷く場面もあった。どの作品も、心を強く打たれるインパクトがあり、「痛々しい」「生々しい」といった感想を持つ参加者も多かった。作品の実物ではなくスライドで鑑賞しているだけでも、強烈なメッセージを発する作品の数々に触れ、実際の作品を見てみたいという気持ちになった。

２．ワークショップ

2.1　行程説明

作業を予定しているＳ　１２４教室に全員が移動し、作業についての説明を石垣氏から受ける。好きな色の染色剤を器に取り水と混ぜて、刷毛で服に色を塗っていくこと。塗った具合が気に入らなければ、水で洗い流せばほとんど色が落ち、改めて塗りなおせること。水の量を加減することで服へのにじみ方、先に塗った色との交り方が楽しめること。自分のコントロールが利かなくなるあたりから俄然楽しさが増すこと。以上の説明を受けたあと、石垣氏の「やってはいけないルールはないので自由に取り組んでください」という言葉を合図に早速作業にとりかかった。

2.2　ワーク

思い思いの染色剤を手に取り、器に入れ水に溶かす作業から始まった。皆、黙々と作業に取り組み刷毛を動かす。少し時間が経つと、実際に刷毛で塗ってみないと正確な色は判らないことから、席が近い人にすでに塗って余った色をもらったりする場面も出てきた。一気に作品を仕上げる人、丁寧に何度も色を塗り重ねる人など様々だったが、作業を開始して概ね 30 分ほどで全員が作品を仕上げた。出来上がった作品をハンガーに吊るして乾かしている最中にも、どんどん色が染み出し混ざっていく様をみて感慨深げに眺めている人が複数名いたのが印象的だった。

2.3　作品鑑賞と作業の振り返り

出来上がった作品をハンガーに吊るして手に持ち、その服にまつわる思い出を話し、作業を終えての感想を、石垣氏との対話形式で一人一人が話した。「情けない体験」「悔しい思い」「混沌としていたあの頃」「頑張っていた自分」など、皆いきいきと過去の体験を話したが、凝縮した感情を刷毛に落としたという点では、共通した発言であったように思う。

「その時の思いはどうでしたか？」という石垣氏の質問に対しても皆即座に当時の際立った感情、すなわち染めたかった感情を言葉で表現していた。
本来、時間が余ればこのタイミングで、作品を着て踊りたい人には踊ってもらう予定だった。残念ながら天候が悪く場所が外でとれなかったことに加えて、作品はどんどん色が滲みだし混ざっていく真っ最中で、着ることができる状態ではなかった。着る行為によって新たにその時の自分の感情と向き合えるのではないかと期待していた自分としては、少し残念だった。

３. 総括

御招きしたテキスタイルアーティストの石垣陽子氏は、女性が経験する身体感覚と、時間経過によってもたらされる記憶の蓄積や感情の変化を捉えて、作品にしてこられた。石垣作品を紹介してもらった後、作業に取り掛かったことが取り組みやすさを生んだように思う。

過去に遡って出来事を思い出し、その時の様々な感情も付随して思い出し作品を作るという過程を想像していたが、過去の出来事はヒントにすぎず、感情は簡単に甦らせることができたことに驚いた。同時に、簡単だったと感じたのは、思い出した感情を凝縮して刷毛に載せる行為である。もし「過去についての思い出を絵に描こう」という課題であったなら、過去の物語（出来事）の一場面を想起し、絵を描いたと思う（そういったワークが、今回ほど誰もが簡単で楽しい作業だったと感じたかどうかは疑問であるが）。

刷毛を用いて色を塗ったこと、塗った先が「服」だったことが、今回のワークの持ち味になっていたのではないだろうか。誰もが、作業を簡単だと思えた理由の一つ目は、「服」のもつ意味がある。過去に着ていた服は、当時の自分の分身であり、服そのものが持つ思い出のシーンがいくつも存在し、ストーリーを思い浮かべることが容易で、その一つを取り出せばよかったからだと思う。「服」を媒体にして過去の自分とは繋がっていたことに気付いた。「服」はその時代を一緒に生きた抜け殻として、今改めて眺めているのである。過去の自分は客体視することができ、どんな過去でも愛おしいものだった。翻って、「現在の自分も捨てたものではない」と新たな感情が湧く。現在の自分の感情にも気づいたことも「服」のなせる業か。

また、刷毛で色を塗ったことによる妙もおもしろい。意図せず色がにじんで染み出し混ざっていく過程を、受け入れていく自分を発見した。にじんでいくだけではなく、下へ下へと色が下がり、どんどん色が薄まる。それさえも、軽々と受け入れる自分がいる。新しい今回の企画での象徴的な「自分を知る」場面だったように思う。まさに、言葉の限界を超えた部分のような気がした。作業することで発見した新たな感情なのだ。これが、白い布地または画用紙で絵を描いたのでは、こうはいかなかったのではないかと、後から感じた。

今回、企画者自身が初めて「染め」を体験したが、「自分を知る」という課題において「服」は取り組みやすいキャンパスであったように思われる。参加者すべてが、夢中で取り組むことができ、「想像以上に楽しかった」という感想をもらったことが、何よりだった。

ポスター

「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」　キャリア形成のための院生自主企画

■■■　■■■　■■■　■■■　■■■　■■■

自分を知るための「表現」
－創造的自己探求のプロセスを体験する

2011年6月17日(金) 17時30分～19時30分

奈良女子大学文学部S棟　**S123**にて

踊ること、音を奏でること、色や形を表すことなど、人の創造的行為はさまざまです。そして、そこには、自分をみつめる時間が流れています。
本企画は、**テキスタイル・アーティスト**の**石垣陽子氏**を講師に迎えるワークショップ形式のセミナーです。　石垣氏の作品を鑑賞した後に、作品シリーズのひとつである「**感情を染めたシャツ**」を参加者自身が製作します。　作品鑑賞と「染め」作業を振り返り、創造的行為に潜在する自己探求のプロセスについて考えます。

「**思い出のある服**」(Tシャツなど、「染め」作業に使用)をご持参ください。

石垣陽子氏のプロフィール:
テキスタイル・アーティスト、京都市立芸術大学院美術研究科修了。
群馬青年ビエンナーレ奨励賞、伊丹国際クラフト展伊丹クラフト賞受賞。
2010年7月奈良女子大学記念館にて石垣陽子作品展「身体の記憶とテキスタイル」。
テキスタイルをベースにした身体表現を目指し、アート、デザイン、舞台衣装など独自の表現方法を模索している。

■■■　■■■　■■■

定員20名 <申し込み順。事前に申し込んでください>

申し込み・問合わせ：

大学院博士前期課程スポーツ科学1回生　青木恵子

E-mail : aoki59@m3.kcn.ne.jp

又は　北棟 **N127** ドア前の申込書に必要事項を記入してください.